

## 馬の熱中症

浦河診療所 櫻井 健太郎

7月にもなり少し暑さを感じる時期になってきました。ここ数年北海道でも夏の猛暑日が見られるようになり、夏の暑さへの対策が必要となってきています。そこで今回は馬の熱中症についてお話しさせていただきます。

体温の主な発生源は運動で、運動すればするほど筋肉から熱が発生し体温が上昇します。体温が上昇すると、血液が体内を循環する際に体内の過剰な熱を集め体の表面に広がった血管を通じて熱を放出します。また大量に汗をかくことで汗の水分が蒸発する時に熱が奪われ体表を冷やすことで体温を下げます。このような仕組みにより環境の温度が変化しても体温を一定に保つことができます。しかし、炎天下などの蒸し暑くジメジメしている環境下においては、筋肉で生成される熱に加え太陽からの強い日差しや地表面からの反射してくる熱が加わり体温が上昇しやすい上に、大量に汗をかいても汗を蒸発させることができないので体温が下がりづらくなります。結果、体内で生じた熱を放出できず、体温が異常に上昇した状態を招き高体温の原因となります。

熱中症の兆候としては以下のようなものが考えられます。1)体温40.5℃～41.5℃という高熱、2)速い呼吸・心拍、3)まっすぐ歩けない、

4)餌を食べない、5)脱水、6)重症の場合横臥し立てなくなり痙攣や意識を失う

上記のような兆候が見られた場合は、直射日光の当たらない場所に避難させ扇風機で風を当て冷たい水で馬の体を冷やしてあげてください。体を冷やす際に太い血管（首の両側を走る頸静脈・前肢の内側を走る静脈・後肢の内側を走る大きな静脈）を中心に冷やしてあげると効果的です。また脳には体温調節中枢があるため、額を氷で冷やしてあげるのも効果があります。重症の場合は、脱水・電解質損失・ショックを治療するために点滴が必要となります。

熱中症対策としては食塩（ナトリウム）の補給が有効です。ナトリウムは喉の渇きを促す効果があるため、馬の血液中に適切な量を維持することが非常に重要です。馬の汗には塩化物とナトリウムが多く含まれているため、馬が大量の発汗をしていると体内のナトリウム濃度が低下し、結果として飲水欲求が低くなる可能性があります。ナトリウムを補給する方法としては、毎日餌に体重200kgあたり大きじ1杯（15g）の食塩を餌に混餌することが推奨されます。

熱中症の兆候は、軽度なものから命に関わる重度なものまであります。仔馬は成馬ほど暑さに強くなく、暑い日の放牧中母馬は元気でも仔馬は体調を崩している可能性があります。熱中症の疑いがある場合は直ちに獣医師に連絡していただくようよろしくお願いいたします。

### 熱中症の治療法

